In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『神々の黄昏』におけるナポレオン三世像
Author	中島, 廣子
Citation	人文研究. 40 巻 2 号, p.81-95.
Issue Date	1988
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	道宗照夫教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部
第 40 巻　第2分冊1988年 31〜45

『神々の黄昏』におけるナポレオン三世像

中　島　廣　子

I

Élémir Bourges が自己の小説中に，フランス第二帝政末期から第三共和制初期にかけての時代の，ヨーロッパ社会の動きをダイナミックに描写していることは，前回，述べたとおりであるが，虚構と史実をないまぜた作品とあって，そこには実在の王侯貴族や著名人の名があまた見いだせよう。なかでも作者は，新旧ふたつの時代を代表する政治家として，*Le Crépuscule des Dieux*『神々の黄昏』(1)においては Napoléon III ナポレオン三世を，*Les Oiseaux s'envolent et les Fleurs tombent*『落花飛鳥』では Thiers ティエールを登場させ，いずれ劣らぬ個性的な人物像を丹念に描きだしてみせている。奇しくもこのふたりは，まずは51年のクーデター，ついで普仏戦争を境にして，互いに対照的な道を歩むこととなり，おまけにどちらも Bismarck ビスマルク相手に悪戦苦闘せねばならなかったわけで，彼らほど盛んに戯画化された，くせのある人間も少なくないだろう。おかげで Bourges は，その両者を配したことによって，小説それ自体に時代のいろをにじませ，独特の雰囲気を醸し出すのに成功したのではないかと考えられる。

そもそも *Le Crépuscule* という小説の出だしは，1866年に起こったプロイセンと南ドイツ連邦諸国との戦争開始の時期にあたり，反プロイセン陣営についたブランケンブルク公国の君主，Charles d'Este カール・デステ大公が主人公となっている。戦争という国家の一大事にもかかわらず，王が自らの誕生祝いに盛大な祝典をあげていると，そこへプロイセン軍侵入の知らせがはいり，華やかな宴から一転して，城をあけて国外に逃れて行かねばならなくなる。難をのがれたこの宮廷の人々は，とりあえずパリにある別邸に身を落ち着け，大公はいつの日かおのが領地に帰り着かんものと，あれこれ方策を試みてみる。そんな彼が働きかけた第一の相手は，当然，ビスマルクだっ

たが，それと同時にフランス皇帝ナポレオン三世にも望みを託す。四年前にパリを訪れた時，手厚くもてなされ，以来，ふたりは「じつに堅い友情で結ばれてきていた」(p.56.) からであった。そこで，大公自らチュイルリー宮に挨拶にでかけてみたり，また皇帝が彼を招いたりする場面が見いだされることになる。

ところで，このナポレオン三世という人物は，出生の時以来，父から冷遇され，さらに第一帝政が崩壊したためフランスにはとどまれず，母のオルタンス女王と兄とともに流浪の生活を余儀なくされ，アウグスブルクで教育を受けたこともあって，フランス語よりドイツ語のほうが達者で，イギリスでも亡命生活を送っていたことがあり，フランス人というよりは「ヨーロッパ人」と呼ばれるほどのコスモポリタンであったようだ。恐らくそうした不安定な状況に長く身を置いたせいか，それとも単に個人的な特殊性のためか，とかく評価の定まらない，不可解な人間とみなされていたようである。フランスの政界に乗り出した当初は，ナポレオンという家名の偉大さのみに支えられた，見栄えのしない，ほとんど無名に近い存在で，皆から≪imbécile≫だの≪médiocre≫だのと評されており，大統領に就任したり，後にクーデターを起こして皇帝の地位にまで登ろうとは，とても想像できないくらいだったと言う。ただ，さすがティエールなどは一抹の不安をいだいたようだし[2]，また，その頃のナポレオンの印象をこうも語っている。「彼は中背で，短足のうえ，やや胴長，スイスの庶民風のものの言い方をし，目にも生気が乏しくて，さてどんな色だったかと思うほどだ」[3]と。きわめて背の低いティエールからみれば「中背」かもしれないが，むしろ小柄なほうで，青い目をしているのに，ナダールなどの写真を見ても，「霧のヴェールに覆われ」[4]た薄目をあけたような顔の，いかにも冴えない人間といったところだ。だが，そのかげに，生来の野心家で，策謀をめぐらせるのが好きな，≪aventurier≫の正体がひそんでいたのである。Claude Dufresne に言わせると，「ルイ・ナポレオンは，ライヴァル達に疑念を起こさせまいとして，そうした印象を実にたくみに利用してみせた」[5]らしく，そんな皇帝の性格の特徴が，小説中ではうまく生かされ，筋の展開にも面白みを加える効果をうみだしている。

II

そこで，作品中のそれぞれの場面において，具体的な描写がどうなされて

いるかを，以下にあげてみよう。まずは第二章において，亡命してきたばかりのカール大公の訪問をうけて，とりあえず，いかにも同情的な態度をみせておく。

大公は皇帝側近の侍従の案内で階段をのぼり，意外に質素ともいえる控えの間を通っていった。と，その時，部屋の入り口にナポレオンの姿が見えた。皇帝は大公を迎え入れんとして，歩みよった。

「おお，陛下！」と，大公は思わず声をかけ，「かような難局にあたり…」が，皇帝は大公の腕をとり，何も言うなというように口に指をあてると，執務室に招き入れた。扉が閉ざされ，会談は非公式で行なわれた。それでも大公が館へ戻った時には，以前よりはるかに落ち着きをみせ，現状を甘んじて受け入れようという態度がみられ，（…）．（pp. 56–7.）

とある。しかしながら，ナポレオン三世に関する書物の記述には，しばしば≪geste≫という表現が用いられているのが目につく。「山師のナポレオンは自分の肚を決して見せないで，他人の意見をよく聞くふりをする」と大佛次郎が評しているが[6]，小説中でも彼は大公が思うほど単純な人間としては描れていない。第六章で，ダイヤの発色に関する実験にことよせて，カール大公を宮殿に招いた皇帝は，やおら「『お身内がたくさんおありのようで，大公殿』と奥歯にもののはさまったような聞き方」（p. 122.）で，その親族の話からきりだし，自分のほうからは何も具体的に触れないうちに，相手が自制心を失ってゆくのを待っている。つまり，大公はさきの戦争でプロイセンに領土を奪われたうえ，その機に乗じて弟がまんまと自分の後釜にすわったことをさしているものと，頭から思い込んでしまったのだ。屈辱的な体験を思い出させられ，思わずかっとなった大公に勝手に喋らせておいたうえで，やおら親切ごかしに行動を慎んだがよいと，何か自分が秘密を握っていることを仄めかすという手にでる。

大公の動向をさぐり，醜聞をあげつらう者がおりましてな。しかも親類縁者間に確執はつきものとはいえ，うっとうしいことに貴殿に対して陰謀がしくまれているのですぞ，とも語った。そして最後に，大公の叔父にあたり後見人でもあった，モデナ大公フランチェスコ五世の名を口にした。（…）

（…）いずれにしろ，こんないやな話を耳に入れるのはいささかつらいの

だが，もはや怒ってもおれぬので，などと言い訳をした。つまりは大公の一族がことを企んでいるとの情報は，それほど確かな筋からえたものだと言うのだ。（…）そしてとにかく事ここにいたっては，事態にはっきり決着をつけるよう力を尽すのが肝要だし，結託した一味の中心人物がフランチェスコ五世だという点をも心得ておくようにと言う。

「信ずるに足る十分な理由がありましてな」と，一語一語念をおすように皇帝は話し続けた。「先方は親族会議を召集すべく画策を始めており，そうなれば貴殿はその管理下におかれてしまいますぞ」

（…）

「フランスだろうと，イタリア，スイス，ロシア，その他の貴家の領地においてであろうと，フランチェスコ五世は寄託行為の名目で，貴殿の資産よりの収益停止をはかり，裁判にもちこんで，自分の側へ引き渡すよう判決を出させる手はずですな」（pp. 122-3.）

などと，えんえんと説く。廃位の王たるカール大公にとって，今や頼れるのは莫大な資産のみであり，その一番の弱点を皇帝はついてくるわけだ。なにしろ，この執拗さこそ，その秘密主義と並んで，ナポレオンの性格の大きな特徴のひとつと見做されているものである[17]。それでもまだ物足りないのか，「『フランチェスコ五世に対抗する，何かよい手立てでもおありですかな』と，（…）表情のない目で大公のほうを見つめたまま立ち上がり」（pp. 123-4.），その日，大公を呼び出した口実に使った，宝石の実験が始まりかけてもまだ，しつこく説得にあたる。

皇帝は彼を戸口のかげにひっぱってゆき，七，八分もかけて，訴訟にもちこんだりしては危険だし，君子にふさわしからぬことだと，とくと言いきかせた。そのうえで皇帝は殿下の耳元にもっと顔をよせ，恐らくは政策上の理由やら極秘の事情まであげてのことだろうが，長々と説得しにかかった。

（…）

「しからば，どうせよと？」

「どうせよと言われれば，うつ手はひとつ。示談ですな」と答える皇帝。

（…）

「今，モデナ大公はローマ滞在中との由。信頼のおける人物を交渉に派遣せらるるがよろしい。そして，訴訟をちらつかせるのですな。吝嗇なモデナ

大公のこと，あわてふためくでありましょう。先ほど言われた書類が，もし本当に重要性をもつものなら…」

「無論のこと！」

「ならば，むこうも喜ぶはず。貴殿の側から訴訟をしかけぬという条件を出せば，先方ももはや差し止め請求なんぞ，口にしたりはしますまい」(pp. 124-5.)

こんな風に皇帝から迫られて，やむなく大公は長男をイタリアへ特使として派遣する。ところが，したたかなナポレオンのこと，実は「ひそかにローマ教皇庁と通じ，フランチェスコ五世を動かそうとしむけていたのだ」(p. 129.)。つまり皇帝は，莫大な資産をめぐって利害の対立する両者を手玉にとり，あわよくば漁夫の利をねらっていたという筋書きである。しかも，さきに引用しておいた文中の省略した箇所で，本題とは直接関係ないはずの事柄をもたくみに挿入し，本当なら言いにくいような自分の本心を，さりげなく表現してみせている。つまり，大公が亡命の王のくせに，金にあかせて壮麗な館をパリに建設したのが，気にくわないのだ。これ以前にも，四章に，似たような場面が出てくる。

なかでも執事のほうから言い出したわけではないが，殿下に泣く泣く切ってすてさせたものがあった。なにかの日には，大公のお召馬車の前を，鶏の羽根飾りをつけた猟騎兵や従僕達が，金のにぎりの幟(のぼり)を手に行進していたが，これの廃止にふみきらざるをえなかったことである。フランス皇帝自らも，この「古風な儀式」について，あえてきついことを言ってきたとあっては，しょせん亡命の王の身のうえ，いくら誇りが傷ついたとて，これほど明らさまな命令には従わぬわけにはゆかなかった。(p. 83.)

なにしろ大公は，ヨーロッパの王侯の中でも有数の資産家であり，その輝かしい家系からは多数の王や皇帝を輩出しているほどで，パレ・ロワイヤルの祝典に招かれたおりも，無数の宝石をつけて出席したり，新しい館が出来るまでのホテルでの仮住居の最中にも，おかかえの料理番につくらせた食事をとるため，半ズボンに金色帽の仕着せを着た従僕たちに，肉と食器一式を納めた船形食器箱を輿にのせて運ばせてみたり，「一風変わったお仕着せや，御者から馬丁から先乗御者，引き具にいたるまで，美々しい馬車のおかげで，

ちょうどそのころ万国博覧会に集まっていた並みいる王侯貴族のなかでも，大公はひときわ人目をひく」(p.71.) 存在だったという調子だから，ただでさえ正統な王家の血筋にたいして引け目のあるナポレオンのこと，面白ろかろうはずもなかったのだ。こんなくだりを読んだだけでも，コンプレックスにみちた皇帝の面影がつたわってこよう。しかも皇帝自身，イギリスで不遇をかこっていた時代，万事，派手好みだったため，たちまちのうちに遺産を使い尽くし，借金をしようにも誰にも相手にされなかったことがあった。そんなおり，唯ひとり，彼に融通してくれたのが，この作品の主人公のモデルになった狂王，ブラウンシュヴァイク公なのだった[8]。小説が出版された当時，そうした事実を人々は，恐らく承知していたのではなかろうか。そうであったとすれば，こうしたくだりは，いかにも皮肉な，痛烈な風刺のこめられたものとして受けとめられただろうと推察される。

さらに皇帝は，ことのついでに，大公の末の息子，オットー伯爵の常軌を逸した振舞いまで，あらいざらい警察に調べあげさせていたのだ。

「実は遺憾ながら」と言いつつ，皇帝は机の隠し引出しに手を入れて，灰色の厚紙の紙ばさみをとり出し，「(ご子息の) お一人のことで苦言を呈さねばならぬのです。それにしても，何もこんなことまで，とは思われぬか」

それはオットー伯に関する，警察の報告書であった。カール・デステがざっと目を通してみると，自分の息子が告発されていたのだった。いや，少なくとも重い嫌疑をかけられていたと言うべきか。ある娼婦を生きながら火あぶりにするという，おぞましい遊びをやったかどであり，その家で不審火があったという。さらにその呪わしい報告書には，オットーがいかに残忍非道の限りをつくしているかが，事細かに書き連ねてあって，これを見て(大公)殿下の顔色が明らかに変わった。(p.126)

そして，≪voix pâteuse (ねちっとした声で)≫大公に勧告するには，オットーをしばらく国外へ退去させておくようにとのこと。くわえて，大公自身の奇行の数々も調べあげられており，「お加減でも悪いのでは」などと嫌味を言うことも忘れていない。ここでも，軍隊と警察力を背景にクーデターを強行し，権力を手中におさめたナポレオンらしい一面がうかがわれる。実際，秩序回復を名目に，「今世紀は警察の保護のもとにある」[9]と表現された

ほどの社会であった。が，その反面，享楽的な気分が浸透し，花の都パリが歓楽の都市と化していったことも事実である。しかも，国家の頂点にたつナポレオンからして，女癖の悪さはあまねく知れわたっていて，Castiglione カスティリヨーネ伯爵夫人との艶聞など，数えあげればきりがなく，また異父兄弟の Morny モルニー公も浮いた噂に事欠かなかったという。そんな雰囲気のフランス宮廷でありながら，自分のことは棚にあげ，他人の素行を云々する可笑しさがこの場面にはある。清水徹氏は第二帝政やそれに続く第三共和制の時代の風俗を評して，

ゾラの『居酒屋』のなかに登場人物のひとりが「皇帝(パタンゲ)のおかげでフランス中が淫売宿になっちまった」と言うくだりがあるが（ナポレオン三世はさまざまな情事のゴシップで有名だった），そういう第二帝政のあとをついだ第三共和制は，皇帝なき第三帝政と言ってもいいほど，すくなくとも文化や風俗の面では前代によく似ていた。『天国と地獄』や『パリ生活』などの陽気で露骨でエロチックなオッフェンバックのオペレッタに代表されるような第二帝政期のパリが，そのまま，マキシムやムーラン・ルージュに代表される≪ベル・エポック≫のパリにつながって，≪花の都パリ≫の神話をつくりあげたわけだが，社交界と盛り場と娼婦という環境に≪専制ブルジョワ制≫が出来あがったために，話は面倒くさくなる。ブルジョワジーは社交界と盛り場と娼婦の≪花の都≫のなかで，その偽善的な道徳を守らねばならぬという奇妙な状態に置かれたのである[10]。

と書いているが，そうした矛盾の格好の例が，大公に忠告する時の皇帝の態度に見いだされ，さぞや小説が発表されたおり，ブルジョワ社会の偽善に窒息せんばかりであった読者らや，世紀末の芸術家たちの共感をよんだことであろう。なお，*Le Crépuscule* のなかでも，大公を取り巻く歌手や女優，女芸人など，それもヨーロッパの各地からパリに集まってきて，妍を競った女たちの生態が鮮やかに描かれていて，産業革命以後，都市集中化の激しかった時期のパリ風俗の一面がうかがわれて，興味深いものがある。

Ⅲ

都市集中化と言えば，ナポレオン三世統治下の大事業のひとつとして忘れ

てはならないのが，Haussmann オスマンによるパリ改造であろう。中世以来の町並みは，道幅も狭く入り組んでいて，衛生状態にも問題があった。ナポレオンは，アメリカへ追放されたり，イギリスで亡命生活を送っていた時代に，近代化された都市の様相をまの当たりにし，早くからそのための構想を練っていたものらしい[11]。そして1832年，1849年，1853年に疫病で多数の犠牲者が出たことも，決断の原因にあげられている[12]。街路を整備し，特に幹線となる大通りをつくり，建物の外観を整え，町並みを美化し，二十世紀の現在にまで機能する近代都市へと脱皮させ，おかげで「永遠の都」ローマに比肩しうる「花の都」となって，帝政下で二度にわたる万国博覧会が開催され，以後，第三共和制になってからも回を重ね，ヨーロッパのみならず，世界各国の人々をひきつけるようになった。だが反面，あまりの改変ぶりに，その評価は功罪相半ばするものがあるとされている。なお，それ以前にも，伯父のナポレオン一世がエトワール広場の周辺整備をはかったことがあり，以来，シャンゼリゼのあたりは投機の対象となり，土地成金が輩出したようだが，第二帝政のパリ改造政策のもとでは，こうした傾向に一段と拍車がかかり，あちこちで新しい建物の建設がブームとなったと言われ，*Le Crépuscule* においても，大公のボージョン館建造の場面で当時の様子がくわしく描写されている。それにしても，ボージョンという名前からして，シャンゼリゼ周辺の土地投機家のひとりであったのだ。そして，この項すでに夜間の工事も可能となり[13]，小説にも，そうした場面が見いだされる (p. 81.)。さらに，パリ改造にともなってか，行政上の区画変更が盛んに行なわれたらしく，この作品の第三章では，大公のシャンゼリゼの別邸の番地が変えられてしまったり (p. 70)，第八章のなかで，オットーが父大公の愛妾であった歌姫の隠れ家を訪れてゆく場面で，パンテオンの裏手のあたりの町名が変更されたばかりで，いまだ旧町名のほうがとおりがよい，という一文があったりする (p. 149.)。

ところでナポレオン三世は，国内では≪parvenu (成上がり)≫の皇帝と旧王党派などから冷たい目を向けられ，対外的にも皇帝に即位したおり，ヨーロッパ諸国の信任をとりつけようとしても，たとえばロシア皇帝からは，慣例通りの≪mon frère≫という呼び方はされず，異例の≪cher ami≫という表現しか用いられず，同列に扱ってもらえぬ悲哀を味わったりしている[14]。くわえて皇后も，もともとフランス出身ではなく，家柄も皇帝の身分と釣り

合う princesse でなかったことなどもあり，とにもかくにも，精一杯，華やかに飾りたて，威光を世に知らしめねばと腐心したと伝えられる[15]。それはまた，同時に，民衆の心をひきつけ，政治の闇の部分から目をそらさせる効果もねらってのことだろう。Pierre de la Gorce はナポレオン三世の政策をこう説明している。

（…）道具立ての手際も見事で，ふんだんに祭りや祝典を催し，いかにも折り好く，思いがけない出来事や示威運動などが勃発するようしむけるのに熱心で，その結果，絶えず舞台が転換して，人の目を奪い，倦怠を覚えられる前に先手を打つことになるからだった[16]。

まず，そのためには，文化面に理解のあるところを示さねばならないだろう。Ministère des Beaux-Arts がつくられたのも，第二帝政下であった。ただし，これは帝政末期にあたっていたため，ごく短命で終わったようだ[17]。また作家の Mérimée メリメが，皇后の里方の一家と親しかったこともあって，皇后側近のひとりとなり，文化財の査察官として，フランス各地の遺跡の発掘や，古い建造物の修理保存に力を注いだ事実はよく知られている。ただ，皇帝の従姉妹の Mathilde マチルド皇女は，趣味豊かな人物で，彼女のサロンには本当の意味での文化人たちが出入りしたようであるが，ウジェニー皇后にとっては，チュイルリー宮殿でひらかれる舞踏会と同じように，それも自分たちの宮廷を彩る要素のひとつ，といった趣があったらしく，「皇帝と共に，装飾的付属品として欠かすことのできない詩人，芸術家，学者たちを宮廷に引きつけた」[18] とする見方が普通のようだ。だから，*Le Crépuscule* でも，著名な科学者の Babinet バビネ氏がチュイルリーに召しだされ，皇帝と大公を前にして，最新の実験を披露する場面が挿入されているのだろう。さらに皇帝自身が，かつて不遇の時代，騒乱をひきおこしたかどで，Ham の要塞に拘禁されたことがあったが，その時，暇つぶしに物理や化学の実験に興味をもち，ついにささやかな実験室まで手に入れたと伝えられ[19]，いっぱしの科学者気取りでいたせいもあるのだろうか。とは言え，学者が実験の準備をするかたわらで，大公相手に熱心に駆け引きをするあたり，「本物」とは言いがたいイメージが伝わってくる描かれようである。しかも当のバビネ氏が，皇帝のところに来るまえに，さきに皇后陛下のもとに伺候し，「それからこちらに参内いたしました」（p. 124.）などという台詞を口にすると

ころなど，王党派に対抗して新たな宮廷作法をいろいろと制定し，威厳を保とうと苦心したナポレオンの自尊心をくすぐる言い回しで，小説の読み手の苦笑をさそう部分である。

さて，「本物」でないのは，チュイルリー宮の食器などについても言えることで，それらは純銀でなく，ルオルツ合金に銀メッキしたものであったようであり，皇后はルイ十五世時代を手本にした宴席をもうけたつもりでも，彼女と親しかったメッテルニヒ公夫人でさえ，「悪くはないけど，二流の会食」との感想をもらしたというエピソードが残っている[20]。作者はさりげない描写ながら，そんなところが宮殿の装飾ひとつにもうかがわれるよう，工夫をこらしたあとが見られる。皇帝の執務室の「緑の絹の壁布」にかかっている，カール・ミューラーの聖母像の絵にふと目をやった大公が，「あれはラファエル風のものですな」と言う場面であるが（p.125.），André Lebois はこうしたところにも，「芸術に関する皇帝のセンスの無さ」が表されているとしている[21]。執務室といったところにふさわしいとも思えぬ選択で，また，輝かしい家系を誇る大公なら，本物のラファエルの絵を飾ってみせただろうに。これは絵画に限らず，音楽についても同様で，新しいオペラ座建設に熱意を示していたくせに，ヴァリエテ座にオッフェンバックの『ジェロルスティン大公女』の公演に出かけて行ったおりの，皇后の珍妙な会話が，彼らの音楽に対する無知をさらけだしたという話が残っているほどである。

さらに，アカデミーの入会式の模様を問う皇帝に，パビネ氏は「あまりの人込みでホールにははいれませんで」と，かわしてしまう。ところが，ナポレオンは状況を察知し，

「それに余の悪口も，さんざん申しておったであろう」と，皇帝は弱々しく笑ってみせた。

その質問に学者は控えめで謙虚な話ぶりながら，ゆっくりと言葉を選びつつ答えるのであった。オルレアン家擁立派の連中が，ド・マスカリーユ侯爵の一件で大騒ぎしすぎ，（天下周知のことながら，この人物はローマ史を，恋愛小詩に仕たててしまおうとしたが，）どうしてもそれを風刺詩だととりたがっておるのでございます，と語った。——つまりはアカデミー入会演説が，シーザーについて論じつつ，何よりナポレオンを批判した内容のものだったとほのめかされたわけで，陛下も苦笑いしてしまった。（p.125.）

なにしろ皇帝は，シーザーの生涯に深い興味を示し，碑銘文学アカデミー会員の Albert Maury アルベール・モーリーの協力を得て，その方面の研究を行なったほどであるから，これは相当皮肉な内容で，秀逸の場面である。ところで，第二帝政期に爆発的な人気を博したオッフェンバックの，あの『オルペウス』について，Siegfried Kracauer は次のように記している。「第二帝政の初めには，古代の著名人たちを嘲弄することは，まさに流行の形をとっていた。それによって，権柄ずくの独裁制に抗議するうっ積した要求が，はっきりと捌け口を獲得した。（…）オッフェンバックのオペレッタが冗談めかして，実は現在の社会の基礎を暴露し，それを通じてブルジョアジーに，かれら自身の存在の本質を気づかせる恐れがあるということであった」[22] と書いているが，それとことは同じで，一層，手厳しいだけである。こうしたあたり，Bourges はまことに生彩ある筆致で描きだし，André Leboisが，「*Le Crépuscule* の最も優れた場面のひとつは，第六章における，カール・デステとナポレオン三世の会見のところだ」[23] と述べているのもうなずける。

Ⅳ

ところで，≪les fastes du Second Empire≫という表現があるが，フランスの社会がまれにみる繁栄を享受しえた時代をなつかしむ気持ちと，虚飾にみちた都市文明のイメージを想起させられるといった，複雑なニュアンスを感じさせる言葉だろう。第二帝政下では，ひんぱんにひらかれた仮装舞踏会に象徴される，華やかで豊かなパリ人士の生活が見いだされる反面，戦争という現実の危機にさらされることも一度ならずあった。第六章における皇帝の執務室の描写の部分で，彼の使う大きな机のうえに，菓子鉢に盛られたチョコレート・ボンボンと，砲艦の模型や歩兵用の背嚢が一緒にならべて置かれているところなど，実に的確にナポレオン三世の政治のありかたを示唆しているではないか。ただし，クリミア戦争やメキシコ遠征など，あくまで外国での出来事であって，普仏戦争までは自国が戦場になることはなかった。とは言え，小説の冒頭，大公が流浪の生活を始めるもととなった普墺戦争で，プロイセンは念願のドイツ統一をはたし，オーストリアと袂を分かち，ヨーロッパ諸国を震憾させ，フランスもきわめて微妙な立場にたたされるのである。直接の被害は受けなかったものの，その時，プロイセン軍の装備のいかに優れているかを，皇帝はいやというほど思い知らされたのだ。そ

こで彼は，フランスの軍隊の近代化をはかろうと試みるが，国民も議会もそうした事情にうとく，無視されてしまう。おまけに，1867年には二度目のパリ万博開催とあって，激変するヨーロッパの情勢をよそに，人々は浮かれ気分に浸る。その万博も幕を閉じようとする時，後のフランスの運命を暗示するかのように，メキシコ皇帝処刑のニュースがはいる。さらに，着々と勢力をたくわえ，機をうかがっていたプロイセンは，1870年，スペイン王位継承をめぐる，ホーエンツォレルン家よりの擁立問題をきっかけに，フランスが動揺したところをねらうのである。ビスマルクの計略にひっかかったフランス側は，勝ち目がないと消極的なナポレオンをしりめに，ナショナリズムに燃え，国民は「ベルリンへ！　ベルリンへ！」と叫んで，開戦へとなだれこんでしまう。

ちょうど同じ頃，カール大公の一家も，避けがたい危機に見舞われていた。パリ亡命後，まずは末娘のクラリベルが神経を病んで世を去り，ついで，次男のハンスが腹違いの妹クリスチアーネとの近親相姦のあげく，ピストル自殺を図る。残された妹は，大公家を去り，修道院にこもってしまう。さらに長男のフランツも，いかさま賭博で官憲に追われる身となる。おまけに最後には，大公家を継がせるつもりだった末っ子のオットーまでが，父の愛妾と共謀し，親殺しを企てる。その決定的な破滅の場面が，奇しくも，普仏戦争開戦の時期とかさなる。最愛の息子に命をねらわれているとも知らず，ボージョン館の豪華な浴室で，大公が湯浴みをしていると，一天にわかにかき曇り，雷鳴が轟き，外では戦場へおもむく兵隊たちが行進してゆく。

暗雲垂れこめる空から，沛然と雨が降りしきっている。篠つく雨のなか，かなたに一分隊が行進していた。おりしも，三日前に普仏戦争が勃発した矢先のこと，いずこか停車場をめざしての行軍であろう。一瞬，（大公の世話係の）ジョヴァンは，垂れた旗と，姿も分かぬ長い行列に見とれたが，すぐに絹の裏を張った鉄の鎧戸を閉めた。（p. 202.）

アウグスブルクで教育をうけ，フランス語よりもドイツ語のほうが得意であったナポレオンにとって，ドイツを敵にまわして攻め込んでゆくのは，言うなれば「親殺し」にも等しいところがある。こうしてみれば，1866年の戦争は，大公のみならず，皇帝にとっても宿命的な悲運の始まりだったと，ここにいたって悟らされることとなる[24]。そして小説の最終章で，大公は老

いさらばえ，病にむしばまれ，親族たちにも見放され，孤独のうちにバイロイトを訪れ，ワーグナーのオペラ『神々の黄昏』を観劇しつつ，ブランケンブルクでの最後の日のことを胸痛む思いで回想する。

おのが権勢に酔い痴れていたそんな日々も，結局は残酷きわまりない，あまたの不幸を招く種となっただけのこと。絶大な勢力を誇っていたこの専制君主をして，ついに無力と虚無の淵にまで追いやってしまったのだ。ああ，冷えびえとしたあの日の夜明けは，よくよく不吉なものだったのか。うるわしの領地を追われ，ヴェンデッセンをあとにした，あの朝。二度と再びそこを見ることができぬ運命にあったとは！（p. 209.）

こうした思いを抱かされるのは，大公ひとりにとどまらなかったはずだ。ナポレオン三世もまた戦にやぶれ，年老いて病に冒された体で捕虜となり，もはや己れの安住の地はなくなる。かくして，亡命にはじまり亡命におわる彼の人生は，しょせん根無し草のそれだったのだ。権力を握った20年近い栄華の歳月も，結局は「金メッキの豪華さ」でしかなく，まさしく≪bohème dorée≫[25]の時代であったというわけだ。しかも，かつての皇帝がこの世を去るのは，この小説の主人公のモデルとなった，ブラウンシュヴァイク公の死と同じ年のことだった。

使用テキスト—Élémir Bourges: *Le Crépuscule des Dieux*, Christian Pirot 1987.
ただし，L'Amitié par le livre/Le Cercle du livre 1954. および Stock 1912. 版をも参照。
邦訳『神々の黄昏』（山田登世子・中島廣子，白水社 1985.）

注

(1) 以下，*Le Crépuscule* と略す。
(2) Georges Roux: *Napoléon III*, Flammarion 1969. p. 141.
(3) Pierre de la Gorce: *Napoléon III et sa politique*, Plon 1933. pp. 13-4.
(4) Siegfried Kracauer: *Pariser Leben Jacques Offenbach und seine Zeit, Eine Gesellschafts-biographie*, Paul List Verlag, 1962.『天国と地獄—ジャック・オッフェンバックと同時代のパリ』（平井正訳，せりか書房 1978, p. 105.）
(5) Claude Dufresne: *L'Impératrice Eugénie*, Perrin 1986. p. 67.

(6) 大佛次郎著『パリ燃ゆ』(ノンフィクション文庫 1983.) 第一巻 p. 42.

(7) P. de la Gorce 前出著作 p. 17.

(8) G. Roux 前出著作 p. 121, p. 146. そこには，ブラウンシュヴァイク公の死後，財産を遺贈されたスイスのジュネーヴ市に保管されている，ふたりの間で交わされた契約の内容が引用されているが，それを読むと，小説中のこうした箇所の設定の面白さがよく理解できる。すなわち，≪Une alliance offensive et défensive est conclue entre nous. Le prince Louis s'engage, au cas où il serait élu roi (*sic*), président ou empereur (*resic*), à m'aider dans la récupération du duché de Brunswick. Le duc agira de même à son égard au cas où son avènement aurait lieu avant qu'il ait réussi en France.≫ (p. 146.) とあるからだ。

(9) Octave Aubry : *Le Second Empire*, Arthème Fayard, 1938. p. 177.

(10) 清水徹著「ベル・エポックの顔立ち」(『ベル・エポック——ナダール写真集』，立風書房 1985.) p. 8. および河盛好蔵著『パリの憂愁—ボードレールとその時代』(河出書房新社 1978.), Paul Léon : *Mérimée et son temps*, P. U. F 1962. を参照

(11) Marc Gaillard : *Paris au XIXe siècle*, Nathan 1981. p. 107.

(12) Ibid., p. 107.

(13) このあたりの事情は Ibid., p. 111. や, Pierre Miquel : *Le Second Empire*, "Trésors de la Photographie", 1979, p. 10. などを参照。また，こうした土地投機のブームは，パリのみにとどまらず，ドーヴィルその他のリゾート地開発にも及んでいたのである。また当時の記録としては，Georges Duchêne : *L'Empire Industriel*, Librairie Centrale, 1869. を参照。

(14) G. Roux 前出著作 pp. 216-7.

(15) C. Dufresne 前出著作 p. 147.

(16) P. de la Gorce 前出著作 p. 66.

(17) *Grand Dictionnaire universel du XIXe Siècle.*

(18) S. Kracauer 前出訳書 p. 125.

(19) G. Roux 前出著作 p. 114.

(20) O. Aubry 前出著作 p. 347.

(21) André Lebois : *Les Tendances du Symbolisme à travers l'Œuvre d'Élémir Bourges*, L'Amitié par le livre/Le Cercle du livre 1952. p. 94. また，O. Aubry 前出著作 p. 371. など参照のこと。

(22) S. Kracauer 前出訳書 p. 162.

(23) A. Lebois 前出著作 p. 94.

(24) Le *Vte* de Beaumont-Vassy : *Histoire intime du Second Empire*, Sartorius 1874. にも，≪Cette anneé 1866 fut donc bien fatale pour la France et son

gouvernement ; un dernier rayon de gloire artistique et de prospérité matérielle éclaira l'année 1867, cette année de l'Exposition, apogée plutôt apparent que réel du second Empire≫と記されている。(p. 346.)

(25) O. Aubry 前出著作 p. 346. チュイルリーの宮廷の雰囲気をさして形容した表現。